

『古代アメリカ』20, 2017, pp.15-40

<論文 特集>

## アンデス斉一説にもとづく祖先イメージの再検討

—ペルー北海岸シカン遺跡からの考古学データをもとに—

松本剛  
(山形大学)

### 【要旨】

アンデス地方の民族学研究において、生や死、祖先についての概念は、これまで生態学的補完や終末論的文化史観、双分制、山岳信仰と擬人化などとともに“*lo andino* (アンデス的なもの)”のひとつとして数えられてきた。民族歴史学資料や民族誌から抽出されたアンデスにおける「祖先の典型的なイメージ」は、すでに考古学事例によっても検証されている。しかし、このイメージの土台となった文字資料はおもに南部高地で記録されたものであり、偏りがある。本稿は、これまで注目を得ることのなかったアンデス世界の北半分に焦点を当て、ペルー北海岸シカン遺跡での発掘調査および詳細な遺物分析から得られた考古学データをもとに、上記の祖先イメージについて再検討することを目的としている。比較検討の結果、従来の祖先イメージと北海岸の考古学事例との間には、いくつかの重要な差異が見られた。また、祖先崇拜儀礼の通時的変化を追うことによって、祖先の概念に変化が生じた可能性があることも明らかになった。地域や時代の特殊性や歴史的な偶発性を十分に考慮し、研究対象を長期的なスパンで見渡すことによって、我々考古学者が“アンデス的なもの”についてのこれまでの議論をさらに発展させることができる可能性が見えてきた。

### 【キーワード】

アンデス斉一説、シカン/ランバイエケ、祖先崇拜、儀礼、饗宴

### 【目次】

1. はじめに
  2. アンデスにおける生・死・祖先とは
  3. 考古学事例との比較：シカン遺跡のデータ分析
  4. 考察
  5. おわりに
-

## 1. はじめに

死生観や祖先についての概念は、これまでアンデス民族学者たちの間で、生態学的補完 [Masuda et al. 1985] や終末論的文化史観 [Allen 1988]、双分制、山岳信仰と擬人化 [Bastien 1978, 1995] などとともに “lo andino (アンデス的なもの)” のひとつとして数えられてきた。考古学を含む文化研究一般において、研究対象となる文化的伝統をより包括的に理解するために、それをある程度一般化し、その他の事象との関係性の中に位置付け、文化横断的な比較を行うことには確かに利点がある。ところが、いかなる文化的伝統も時代や地域の特殊性や歴史的な偶発性による影響を免れない。したがって「アンデス的」の名の下に、ある地域のある時代において記録された文化的伝統を無批判に広く一般化してしまうことには危険がともなう。なぜなら、一見類似して見える文化的伝統の実践も、それぞれの社会的・環境的コンテキストの中で異なる意味を持っていたかもしれないからである。

このように時空を超えた汎アンデス的な特徴を探し、アンデス地域全体を均質化してしまうアプローチは、ある文化的概念が地域によって異なったり、時とともに変化する可能性を無意識的に排除してしまうことにつながることから、Shimada and Fitzsimmons [2015] によって「アンデス斉一説」として批判されている。斉一説とは元来、地学において提唱された仮説であり、「今日観察できる自然界の法則やプロセスは、過去においても常に同じように機能・再現していたものであり、したがって世界のいかなる地域においても適用可能である」と仮定する。

アンデス斉一説を支持する考古学者たちはこれまで、民族歴史学資料や民族誌からアンデスにおける「祖先の典型的なイメージ」を抽出し、考古学事例を説明するためのモデルとして援用してきたが、このイメージの土台となった文字資料はおもに南部高地で記録されたものであり、偏りがある。本稿では、これまで注目を得ることのなかったアンデス世界の北半分に焦点を当て、ペルー北海岸シカン遺跡での発掘調査および詳細な遺物分析から得られた考古学データをもとに、上記の祖先イメージについて再検討してみたい。

## 2. アンデスにおける生・死・祖先とは

### 2-1. 民族歴史学資料および民族誌における記述

スペイン人司祭によって残された様々な記録から、スペイン人侵入以前のアンデス（少なくともタワンティンスーユ）の人々が、キリスト教の理念に支配された当時の西洋人の目には極めて異端と映るやり方で死者や神々を祀っていたことにはや疑いの余地はない [Ariaga 1968 [1621]; Cobo 1990 [1653]; Duviols 1967 など]。このことは、たとえばベタンソスが残したインカ王族の証言にもとづくタワンティンスーユの歴史や伝統についての記録 [Betanzos 1996 [1551], 2004 [1551]] や、グアマン・ポマがスペイン王に対して送った 1000 ページを越す多くのイラスト入りの手紙 [Guaman Poma de Ayala 1956-66 [1615]] など、ある程度ネイティブな視点を反映した文字記録によっても証明されてきた。

16～20 世紀に記録された民族歴史学資料のレビューをもとに、カウリケ [Kaulicke 1997] はアンデス地方における死の概念についての説明モデルを提示し、考古学データによる実例をもってそれが先史時代に広く適用できると主張した。カウリケによれば、死者の身体的な永続性を維持することを志向したアンデスの死生観は、その複雑さや可変性にもかかわらず、8000 年もの昔から存在していたという。またカウリケは、アンデスの人々にとっての「死」とは単なる「生」の反語ではなく、むしろ超社会的な条件のもとに出現し、最終的には再生

につながる循環シークエンスのひとつの状態に過ぎないと主張する。したがって死者と生者は不可分の関係にあると考える。永遠性を求める社会において、「死」はそれを脅かす危機である。多くの社会において、ある儀礼的なプロセスを経て死者が祖先に変身させられる理由はここにある。つまり、この変身によって死者は超世代的な集合体に参加し、社会の循環シークエンスを永続化することができるのだという。したがって「死の儀礼」は、妨害された社会秩序を回復させるための手段と見なされる。

アンデス地方における循環的な変身シークエンスとしての生と死の概念は、一連の植物メタファーや宇宙論的な水利システムの概念に反映されている。植物メタファーは、死者を種子や根茎、もしくはチュニユ（保存用に凍結乾燥された塊茎）のように「乾燥し萎びているものの、いまだ生命を生み出す力を持った植物の部位」と結びつける[Allen 1982]。この考え方においては、人が死ぬと、その遺体が完全に乾燥する前に、アニマと呼ばれる「生のエッセンス」が減りゆく身体から（まさに種子が乾燥した植物から離脱するように）抜け出す。乾燥した遺体が織物の包みにくるまれて崇拜の対象（＝マルキ）となる一方で、アニマはそれがもともと属していたパカリーナと呼ばれる安息地、もしくは「永遠の農場」としてイメージされるウパイマルカにある生命の起源地に帰ると考えられている。ウパイマルカに戻ったアニマは再び移植され、繁殖能力を再生し、子孫を生み出す[Salomon 1995:341]。かつてタワテンティンスーユにおいては、元君主たちのマルキは子孫としての実をなす王族の「家系樹」の象徴であった[Sherbondy 1986]。換言すれば、マルキは王族家系の歴史を体現し、彼らの子孫（パナカもしくは王族アイリュ）の存在を正当化するものであった[Randall 1982; Sillar 1992]。1532年のスペイン人侵入の直前、ワスカルとアタワルパの間での争いの際にパチャクティ・トゥパック・ユパンキのマルキが「捕虜になった」のはこのためであった。マルキを強奪し、それを燃やすことは、インカ王族の歴史を書き換えるための強力な手段であった。

一方、先スペイン期アンデスの創造神ビラコチャに関する神話によれば、ビラコチャが太陽や月、星などとともにアンデスのすべての人々の祖先を作り出したのはチチカカ湖においてであった。上述のウパイマルカがしばしばチチカカ湖と同一視され、始原期の水源とみなされるのはこのためである。ビラコチャは祖先たちに、チチカカ湖から神話的な地下水利システムを通して移動し、湖や泉、川、丘、洞窟、木の根など、様々な地物から出現し、そこにみずからの親族集団（アイリュ）を築くよう命じた。大地に人々が住み始めたのはそれからである[Sherbondy 1982:120-125]。祖先らが出現したこれらの地物はパカリーナと呼ばれるようになり、通常は神殿によって象徴され、アイリュの構成員らによってその起源地として崇拜された[Arriaga 1968 [1621]:182; Salomon 1991:19]。

現代に目を向ければ、Bastien [1995]の民族誌調査は、ボリビア・カリヤワヤにおける山岳民族が持つ、循環的な変身シークエンスとしての生と死に関連した類似概念を明らかにした。彼らによれば、生命は地球上にあるウマ・パチャ<sup>(註1)</sup>と呼ばれる神話的な起源地からやって来る。子供たちは、畑を耕し、種を蒔き、発芽させ、育て、収穫するという農業活動のサイクルを通して育ち、大地から恩恵を受けることを学び、ルナ（大人）になる。このサイクルを繰り返すことで、ルナはパサド・ルナ（より大人）へと成熟していき、最終的にマチュラ（完全な人）と認められるようになる。マチュラは死ぬと地下の川を通してウマ・パチャへと帰る[Arguedas 1956を参照]。

上記の植物メタファーや生と死の循環シークエンスといった概念の根底にあるのは、肉体および宇宙の構造やプロセスに関する根本的な捉え方、つまり生き物（たとえば動植物や人間）はすべてく水でできた、湿ったもの>とく土からできた、乾いたもの>の結合であるという考えである。たとえば先スペイン期後期から植民地期初期にかけてのワロチリ地方の世界観では、く平穏さや中心性を示す性質（深さ、固形性、乾燥、安定、

受精能力、女性性など）>と<外部軌道を休みなく動き回る性質（高さ、流動性、湿気、動き、授精能力、男性性など）>を対比している。外側にある水が内側にある土に打ち寄せると、土の上を水が循環する中でこれら二つの根本的な活力が混ざり合い、水と土の属性を備え合わせた生命が出現する<sup>（註2）</sup> [Salomon 1991:16]。こうした異なる（もしくは拮抗する）ものの補完し合う二つの要素の結合は、<湿った、混沌としたものとしての肉>と、<乾いた、構造化されたものとしての骨>の二項対立による概念化の中にも見られる [Classen 1990:174-175]。しかしながら、死を迎えるとこの結合は解体する。固形物と液体からなる身体は分離し、元の物質に戻る [Allen 1982:192]。儀礼が役割を果たすのはこの時点である。（祖先を意識したものを含めた）儀礼行動の目的は、上に述べたような要素間の相互作用や交流を通して、生命エネルギーが安定して循環するよう確保することにある [Salomon 1991:16]。

先に述べたカウリケの説明モデルにおける祖先の潜在力と豊穡性は、彼らの無時間性や匿名性に由来すると考えられる。真に強力な祖先たちは、歴史的な変化や時間的制約に縛られることは決してない。無時間性は超越的な力の源であり、永遠性を手に入れるための必須条件である。無時間的で超越的な存在であるがゆえに、彼らは社会的な出来事や自然現象を位置付けるためのインデックスとして、またあらゆる困難を回避するための手段として利用されるのである。したがって永遠性を追求するためには、死を免れない人間の時間的有限性、つまりその短命さを克服しなければならない。さもなければ、彼らは肉体死の後、時間の経過とともに忘れ去られてしまう。死者から祖先を作り出すプロセスは、人間存在の時間性・有限性を克服し、超越するためのプロセスである。まだ名前のある死者がより超越的な存在へと変身する過程においては、死者の個人的な属性がすべて抹消される。これによって、その存在に永続性を与えることが可能となるからである。したがって最近亡くなったため、このプロセスを経ていない、いまだ名前を持つ死者はそれほど力を持ってはいない。

## 2-2. 文字資料から抽出された祖先の「典型的なイメージ」

上述の民族歴史学資料は、先スペイン期の祖先やその崇拝について研究する考古学者たちにとって極めて重要な情報源となった。こうした研究に共通するのは、文字資料から当時の宗教信仰の本質を抽出するという本質主義的アプローチであった。Dulanto [2002] は、Salomon [1995:319-323] の研究を参考に、民族歴史学資料におけるアンデスの祖先崇拝に関する記述から、景観、公共空間、ミイラ化された遺体などの空間的・物質的側面に注目して、考古学データと比較可能な「典型的なイメージ」なるものを抽出している。そして、それがある特定の考古学事例と比べたときに、どの程度の類似性と差異を示すのかについて議論している。抽出された民族歴史学的イメージは以下のようにまとめられる：

アイリュと呼ばれる、土地を所有した共同体のいくつかがリャクタ<sup>（註3）</sup>と呼ばれる単位にまとめられ、その土地の同一の祭祀センターに所属させられた。このセンターには、居住空間の近くもしくはそれを見渡せる位置に、しばしばカヤン<sup>（註4）</sup>と呼ばれる小さな広場が配されていた。広場の縁には小部屋が隣接し、それぞれの小部屋にはアイリュ創始者のミイラ化した遺体（つまりマルキ<sup>（註5）</sup>）がコノバ<sup>（註6）</sup>と呼ばれる聖なる品々とともに収められた。アイリュは定期的に広場に集い、合同でミイラ化した創始者らを祀り、土地や資源の権利を祝った。

これらの創始者たちは、他の超人的な祖先らとともに、いくつもの家系が入れ子になった大きなネットワークの中に組み込まれた。マルキはこのネットワークの下位レベルに位置付けられ、ひとつ上のレベルにある共通の超人的な祖先の下でひとまとめにされた。この超人的な祖先はワカと呼ばれ、その物

理の実体は、石柱や塑像、その他の聖なる物体に内在する。さらに、これらのワカはしばしば家系ネットワークのもっとも上位にある恒久的な地物や自然力（たとえば雪を頂いた大きな山や稲妻）の子孫であるとみなされた。アンデスの祖先は、世帯レベルの組織をより大きな宇宙論的な序列に結びつける、したがって原理的には既知の世界の全てを網羅する、この途切れのない家系の網の目からなる。

この民族歴史的イメージを考古学事例と比較するため、ドゥラント [Dulanto 2002] は前期ホライズン（紀元前 700-200 年頃）にペルー中央海岸ルリン谷のパンパ・チカ遺跡において行われたと考えられる祖先崇拜に注目した。彼は（1）他の遺跡や自然資源との関連におけるパンパ・チカ遺跡の立地、（2）遺跡内における建築やアクティビティ・エリアの内部組織、（3）遺体を含む様々なコンテキストの形成・変容過程、に関して類似点と相違点の両方を見つけた。

類似点としては、パンパ・チカ遺跡は近隣の居住区から少なくとも 1 キロは離れているものの、それを見渡し、同時にその地域のいくつかの重要な資源につながる要所に位置していた点が挙げられている。この距離に関して、ドゥラント [Dulanto 2002:113] は地理的な距離と系統関係の距離の間には相関関係があると主張し、「祖先崇拜を行った場所が居住区から遠ければ遠いほど、そこで祀られた祖先と居住区に暮らしていた子孫の系統関係上の距離は遠くなる」と説明している。

また、パンパ・チカ遺跡は、おそらく遺体を収納するために建てられたよく目立つ建築物がある埋葬空間と、多くの人々を収容するための儀礼空間からなる。ちなみに埋葬データは遺体の埋葬後処理や再埋葬の痕跡を示しており、前者の建物はおそらく青年期および成人男性の遺体を一時的に収納しておくために使用された。民族歴史学資料の記述と異なるのは、これら二つの空間が明確に分離・区別されている点である。遺体を収めたと考えられている場所は、より閉じられた空間にあるため、外部から遮断されており、参加者同士の関係がより親密な活動のために使用されていたことを示唆している。これに対し、人々が集まるための場所はより開かれており、たとえば公然陳列や饗宴など、規模の大きな公共性の高い活動のために使用されたことを示唆している。やや相違点は認められるものの、これらの発見をもとに、ドゥラントはパンパ・チカ遺跡は上述の祖先崇拜の民族歴史的イメージにしたがってデザイン・建設・使用されたと結論付けている。

こうして見てくると、抽出されたアンデスの祖先イメージは、Fortes [1965, 1976] や Newell [1976] による祖先とその顕著な特質についての文化横断的な定義とも共通性があることがわかる [Matsumoto 2014a:15-38 を参照]。アンデスの人々は肉体死の後にある生を信じ、死者は生者の生活に対し、主として有益な影響をもたらし続けると考えた。死者は子孫らによって儀礼的に祖先へと変身させられ（たとえばプルカヤ祭、イリヤを作る儀礼プロセスの詳細については Cieza de León 1883 [1551]:96 を参照）、祖先と生者の長期にわたる交流は儀礼という形を取り、スペシャリストによって特定の場所で執り行われた（たとえばポリビア・カリヤワ族の預言者ヤチャクナによるコカ占いや儀礼; Bastien 1995:361; Bastien 1973, 1978 も参照）。祖先崇拜はつまり、世界秩序の正常で健全な循環を確かなものとし、富や豊穡を願うための儀礼的な試みと見なされた。その明白な目的は自然の肥沃化や共同体の再生である。

また、Helms [1998] が論じている「新興イエ祖先 (emergent house ancestors)」と「第一原理祖先 (first-principle ancestors)」の区分はアンデスにおいても存在したようである。たとえば小さな広場・カヤンにて祀られた名前を持った祖先のマルキが前者であり、景観的要素（地物や自然の力など）と結び付けられた超人間的な英雄/祖先（ワカ）が後者である。これらの種類の異なる祖先たちは宇宙論的な階層構造の中に組み込まれ、長い神話的系譜を有する一族の一員であると見なされた。この神話的系譜のより新しい下位レベルでは、祖先らはミイ



ラ化され、イエに関連した文脈の中で身体的な存在として崇拝の対象（新興イエ祖先）になったのに対し、より古い上位レベルでは、露頭や山、島などの地物が非身体的で超人間的な祖先（ワカ）そのものとして擬人化・英雄視されたり（第一原理祖先）、そうした英雄たちが発源した場所と見なされた。これらの超人間的な第一原理祖先たちは、下位レベルにある新興イエ祖先たちの共通の親であると見なされ、生者である子孫らとは稲妻や火、雨、雹、霰などの自然現象を通して接触を持った。アンデスにおけるこの超人間的な祖先の特徴付けは、第一原理祖先が世界のどこか別の場所にある、文化的景観の中のある特定の地点においてのみ具体化され、アクセス可能であるという事実とも同期する〔たとえば Endicott 1979:124; Evens 1984:327-328; Goldman 1963:184, 254; Gudeman 1986:92; Helms 1998:38-39; Herskovits 1938:208; Myers 1986:126, 240-243 など〕。

したがって、議論のスケールをアンデス地域からさらに広げて世界全体を俯瞰してみると、当然のことながら、肉体の死後も続く生の概念も、社会の永続性を求めて死者を祖先に変身させる儀礼も、祖先が組み込まれていく系統の階層構造について概念も、いずれもアンデスに限ったことではないことがわかり、「アンデス的なもの」の輪郭がぼやけてくる。おそらくもっとも「アンデス的」なのは、（１）変身シークエンスとしての生と死の概念を循環的なものと捉え、植物メタファーや宇宙論的な水利システムという具象的なモチーフに落とし込んでいるところや、（２）祖先追悼のための広場とそれを縁取る祖先のミイラを収納するための小部屋をひとつの空間パッケージとして捉えているところ、（３）系統の階層構造に地物や自然の力のような超人間的な祖先を組み込んでいるところ、などであろう。祖先崇拝という文化的概念そのものは世界のあらゆる社会（おもにアジア、アフリカ各地）で共有されているが、それぞれの地域の独自性は、祖先崇拝のあらゆる概念要素をどう具象化しているかにある。

### 2-3. 歴史主義的視点の重要性

Salomon [1995:339] も祖先崇拝全般に見られる構造的な類似性を強調し、「祖先たちの世界は多くの文化において、この社会に永続性を与えたものであり、固定化された原型的な理想であると考えられている」と指摘する。墓の「社会構造の劇場」としてのイメージは、組織的な継続性を称賛する共同体としての理想の反映である [Salomon 1995:341]。しかし他の民族学者とは異なり、サロモンは同時に祖先カルトの動的な側面も強調する。彼によれば、「祖先カルトの実践は、相続に関する規範がもたらす機械的な帰結ではなく、相続の反復と、随時必要となる予期できない現状を踏まえた利害関係の調停との間の相互作用の産物である」 [Salomon 1995:346]。この原型的な理想としての祖先崇拝のイメージと、予期せぬ現状を踏まえたその実践との関係は、実践理論で言うところの構造と実践の関係に似ている。したがって、祖先カルトは社会政治的な関心をその内に取り込むだけでなく、その時代の特異性や偶発性との関連において形作られたいくつかの内在的な特徴をひとつにまとめる働きを持っていると言える。

たとえばタワンティンスーユでは、現在の君主とかつての君主のパナカとの間の政治的な交渉や示談は、ミイラ化されたかつての君主に代わって話すオラクルの仲介のもとで行われた。「彼ら（オラクル）は、現在の君主の主権を認めつつも、その支配下にある集団から意見や情報を受け取りながら、権力の中心から外された社会集団のために神格化された元君主として話をした」 [Gose 1996:1]。元君主のパナカはこのオラクルによる神託を通して、現在の君主の政治課題に影響を与えるだけでなく、異議を申し立てることさえ試みた。同様に Nielsen [2008] も、崇拝する側とされる側の双方が異なる義務や社会的な不公平を抱えながら階層的に組み込まれる系譜システムにおいても、被支配集団が構造化された経済的・政治的秩序に対して異議申し立てをするための社会的交渉の余地は常に残されていると主張している。

民族歴史学および民族誌における解釈や説明モデルは、私たちにアンデスにおける祖先の特色を世界の他地域のそれとの比較において理解するための手段を与えてくれるという点においてきわめて重要である。しかしながら、それらを考古学的に適用する際には十分に注意しなければならない。文化横断的に共通する祖先（崇拜）の「本質」や「アンデス的なもの」にこだわるあまり歴史的な視点が欠落すると、宗教信仰や実践の動的で歴史的に偶発的な側面を見落としてしまう危険性があるためである。考古学における時間軸のスケールは、民族歴史学や民族誌のそれと比べるとずっと長く、それは考古学研究の大きな特長のひとつである。この特長は私たち考古学者に変化や安定をより大きなスケールで観察することを可能にするだけでなく、先史時代にしか存在しない宗教信仰や実践の物的痕跡を与えてくれるかもしれない。したがって、考古学データを用いた比較研究は、ある一時期だけを捉えて本質主義的な視点からチェックリスト方式で祖先カルトと定義付けられる特徴を見つけるだけでなく、それらがどのようなコンテキストで見つかったのかを明らかにし、またそれらが変化するのであれば、どのように変化していくのかを長いスパンで追わなくてはならない。

### 3. 考古学事例との比較：シカン遺跡のデータ分析

ここではまず、考古学者たちがこれまで「先スペイン期アンデスにおける祖先崇拜の典型的なイメージ」として扱ってきたものは、主に山岳地域（とくに南部）から得られた情報にもとづいていることを指摘したい。祖先崇拜に関する研究が多い南部高地と比べて、ペルー北海岸をはじめとするアンデスの他地域の研究事例数の少なさはひとときわ際立っている。これは恐らく、1970年代にジョン・ムラやジョン・ロウ、ヘルマン・トリムボーン、トム・ザウデマらによって教育された民族歴史学者たちがフィールドワークのために向かった先がおもに山岳地域であったことと無関係ではない<sup>(註7)</sup> [Salomon 1985:92-93]。

アンデス世界の北半分からの研究事例の少なさは、Shimada et al. [2015, Table 3] が最近発表した、ペルー中央および北海岸において先土器時代後期からはじまる死者と生者の交流に関する考古学的証拠についての総括によって補えるかもしれない。たとえばレクアイからチチカカ湖周辺地域にかけての山岳地帯では、チュルパ（地上式塔状墓）やマチャイ（洞窟）のように、死者の遺体が目に触れるように安置することに主眼が置かれる。これに対し、北海岸では高貴な人物が地中深くに埋葬された。位の高い人物ほどより深く埋葬されたという傾向がある。この大きな違いはふたつの地理的領域を区別するとともに、海岸地帯における死者とその遺体、アニマ（魂）が山岳地帯とは異なった形で認識されていた可能性を示唆する。

この章では、ペルー北海岸ラ・レチェ川中流域に位置するシカン遺跡での発掘および遺物分析の結果をもって、上記の「先スペイン期アンデスにおける祖先崇拜の典型的なイメージ」と比較してみたい。

#### 3-1. 調査地域および遺跡の概要

調査地は、ペルー北海岸ラ・レチェ川中流域にて国立保護区として指定された亜熱帯乾燥林（ポマ国立森林歴史保護区）の中に位置する（図1）。塩分を多く含む土地はきわめて乾燥しており、繁殖力が強く土質を選ばないと言われるアルガラボ（*Prosopis* spp.）が著しく密生している。年間を通して、通常この地域にはほとんど雨が降らないため、農業活動は山岳地域からの雨水に依存することになる。過去においても現代においても、生態的な限界が社会経済的発展の限界と一致しており、この点に着目した Kosok [1965] が1940年代後半にシャデールとともに航空写真を利用した大規模な踏査を行い、海岸地帯における社会発展と治水技術の発展の関連性について論じている。本研究の調査対象である北海岸北部は耕地可能面積が広く、傾斜が緩やかなため、

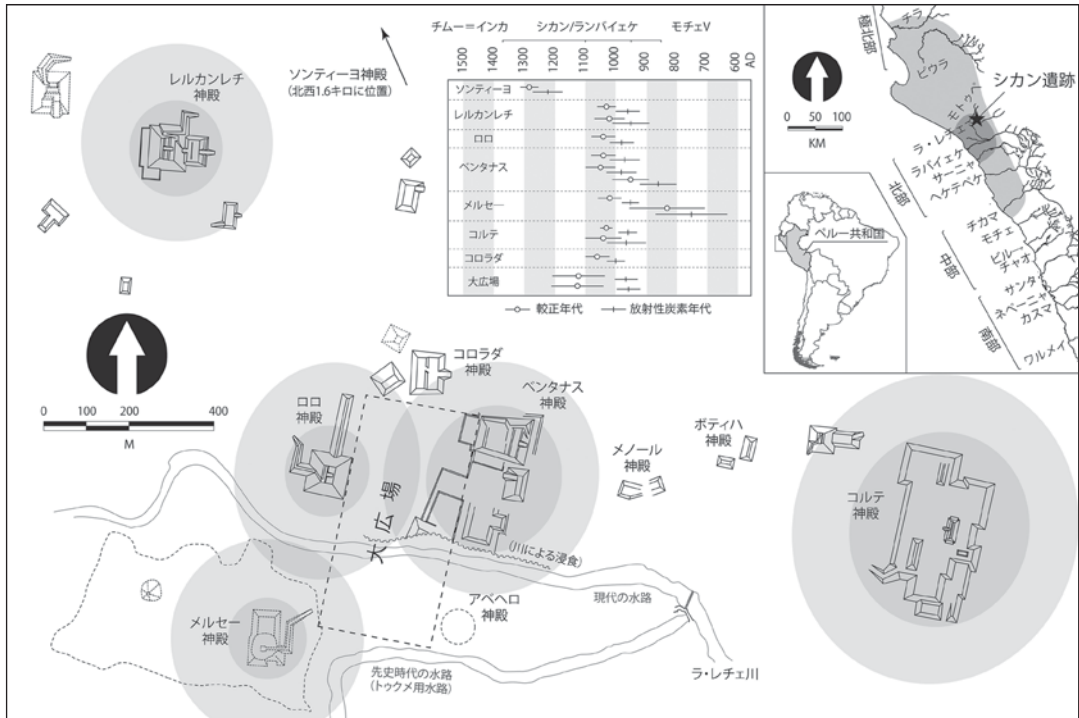


図1 シカン遺跡内の神殿基壇群の再現図と主要基壇の放射性炭素年代（再現図は Shimada 1990:310, 図5 をもとに再描画。年代表は Shimada 1990:309, 図4 をもとに再描画および新情報追加）

とくに生産力が高かったといわれる〔Collin Delavaud 1968; Shimada 1981; Moseley 1983 を参照〕。おもにモチエV期以降に建設が始まったとされる灌漑水路は5つの谷（モトゥペ、ラ・レチェ、ランバイエケ、サーニヤ、ヘケテペケ）<sup>（註8）</sup>を相互に結ぶネットワーク「ランバイエケ複合」を形成し、これによって強固に支えられた自給自足経済がこの地の社会発展の礎になった〔Kosok 1965; Nolan 1980; Tschauner 2001; Hayashida 2006 を参照〕。

ほとんど雨が降らない海岸地帯にも、エル・ニーニョ南方振動（El Niño-Southern Oscillation もしくは ENSO）と呼ばれる定期的な気候現象の際にのみ例外的な変化が起きる。4～5年に一度起こる南太平洋の海面気圧変化により、西から東向きになった赤道海流がペルー・エクアドル沖に流れ込み、南米大陸の西岸沖を北上する栄養豊かなフンボルト海流（寒流）の表流水を南へ押し戻す。これにより、フンボルト海流の栄養分が浮上しなくなり、海棲生物の食物連鎖を混乱させると同時に、温暖な赤道海流によって引き起こされた温暖湿潤な気候が大雨や洪水（4月～10月）を引き起こし、色のない海岸砂漠を瞬く間に一面の緑に激変させる。生命にとっての基本的ニーズとしての水の重要性や、破壊的であると同時に生命を生み出す力を持つ洪水は、この地域の人々の世界観の形成に根本的な影響を与えたのではないかと推測する。

シカンの歴史は土器・建築様式の通時的変化と放射性炭素年代に基づいて、初期（紀元後850～950年）、中期（950～1100年）、後期（1100～1375年）に三分割される〔Shimada 1990〕。モチエの政治的崩壊後の混沌の中から宗教的指導者を中心にして興ったシカンは、ラ・レチェ川中流域に最初の首都・シカン遺跡を建設し（図1）、中期シカン期半ばまでに大規模な灌漑農耕と漁労、高度な冶金技術、遠距離交易などを経済基盤に強固な支配体制を築いた〔Shimada 2014〕。しかし、中期シカン社会は比較的短命で11世紀末には終焉を迎えたと考えられている。Shimada〔1990〕はシカン遺跡内の主要基壇上の神殿が燃やされていることに注目し、放射性炭



素年代測定法によって火が放たれた年代を測定した。いずれの年代も 1100 年頃であり (図 1)、土器の装飾からシカン神と呼ばれる一神教的な神の表象が消える時期と一致することが判明した。貴族にとって最大の権力資源であった神の消失は、中期シカン期の支配体制の終焉と捉えられた。さらに神殿放棄のタイミングは Thompson et al. [1985] による山岳氷河 (ケルカヤ氷河) のコアサンプルの分析結果が示唆する大規模な気候変動とも一致した。そこで Shimada [1991] は、1020 年頃から 30 年間続いた大旱魃とそれに続く大洪水 (メガ・エル・ニーニョ) によって経済的な大打撃を受けた中期シカン社会では、自然を司るシカン神への信仰が揺らぎ、その結果、灌漑農耕や冶金活動などによって大きな負担を負わされていた一般民衆が反乱を起こし、神殿に火を放ったと説明した。シカン遺跡を追われた貴族は南西に約 7 キロ離れたトゥクメ遺跡に新しい都を建設し、その後、シカン政体は後期シカン期において二度目の繁栄を迎えた [Heyerdahl et al. 1995 を参照]。

シカン遺跡は、上述の通りシカンの最盛期に築かれた首都で、約二平方キロの範囲に点在する無数の神殿基壇群と貴族用居住区を中心として、その四方を平民用居住区が囲んでいる (図 1)。中心部に位置する主要神殿の麓には墓や工芸品工房の存在が一部確認されている。それらのうち、これまで最も研究が進んでいるロロ神殿では、地中レーダー探査によって麓の墓地が計画的なレイアウトを持っていた可能性が指摘され、1990 年代に行われた二つの大きな立坑 (シャフト) 墓の発掘によってそれが部分的に証明された [Shimada 1995 など]。出土した遺体の形質人類学的分析などから、Shimada et al. [2004] は「ロロ神殿を含む主要神殿はシカンを支配していた複数の貴族家系のそれぞれと関連しており、彼らが共有していた祖先崇拜信仰の物理的中心であった」という仮説を提唱した。

ところがシカン遺跡でそれまでに発掘された墓地はみな上部が盗掘によって荒らされており、祖先崇拜のもっとも重要な特徴のひとつである埋葬後も継続する死者と生者の儀礼的交流の痕跡 [Matsumoto 2014a:26-27] など、祖先崇拜を考古学的に定義し得る重要な物証が得られていなかった。したがって未盗掘の墓を対象にし、この仮説を発掘と遺物分析の両面から詳細に再検証することが必要であった。

### 3-2. 調査の目的と方法

従来の考古学において、祖先崇拜とは主に地縁・血縁に基づく比較的小さな集団が社会発展を目指す際に取った経済戦略の一つであったと考えられてきた [Goody 1962; Meggitt 1965a, 1965b; Saxe 1970, 1971; Bloch 1971; Meillassoux 1972; Renfrew 1976; Goldstein 1976, 1981; Chapman 1981; Glazier 1984 など を参照]。このモデルでは、ある集団が先祖代々の墓とそこで継続的に行われた儀礼を土地や自然資源の所有・利用権を主張するために戦略的に用いたと説明される。したがって、祖先たちの墓は経済戦略上重要な立地に作られるということになる [Saxe 1970, 1971]。しかし筆者はこのモデルをシカンに適用すること是不適切であろうと考えた。中期シカン期の社会はすでに複雑化が進み、経済的にも絶頂期にあった複合社会であった。上述のように、シカンは広大で肥沃な海岸地帯での灌漑農耕を基盤に強固な自足自給経済を築き、その基盤の上に高度な冶金技術を発展させていた。金を含む合金製品やヒ素青銅を大量生産し、それを遠距離交易を通じて周辺地域に流通させることによって影響力を拡大したと考えられている [Shimada 1995; Shimada et al. 2000]。経済基盤を灌漑農耕と冶金技術に依拠していたシカンであったが、シカン遺跡は経済戦略上重要と考えられる場所に配されていたわけではなかった。ラ・レチュエ川の中流域に位置し、河川分岐点や灌漑用水の取水口、鉱山などからは遠いのである。さらに、これまでの地質学調査によって、遺跡周辺は上・下流域に比べて傾斜角がきつい上に沖積粘土層が厚すぎて農耕には適さない土地であることも判明している [Craig and Shimada 1986]。以上の理由により、経済発展の絶頂期にあったシカンの首都の中心部で、貴族たちが祖先崇拜を行った動機を適切に解釈するためには、

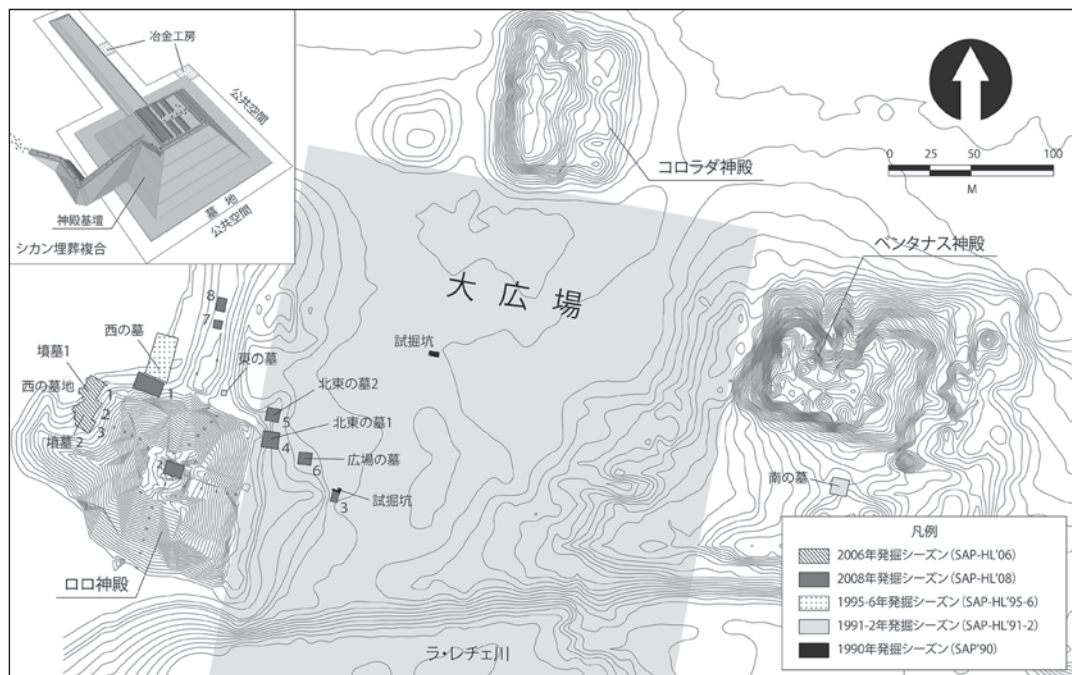


図2 シカン遺跡中心部においてこれまでに発掘された発掘区（等高線図はルイス・カセレスおよびナタリア・グスマンの好意により提供）

新たな説明モデルが必要であると判断した。

このような問題意識のもと、筆者による博士論文研究は、ロロ神殿の麓で地中レーダー探査と試掘によって新たに見つかった墓とその周辺（大広場）で行われた儀礼に焦点を当て（図2）、祖先崇拝の有無を考古学データによって再検証するとともに、シカンの祖先崇拝の裏にあった動機を説明できる新しい解釈モデルの提示をその主題とした。南イリノイ大学人類学科・島田泉教授率いるシカン考古学プロジェクト（SAP）による二度の発掘調査（2006および2008年）に参加してデータ収集を行い、発掘後には松下幸之助記念財団やアメリカ国立科学財団からの研究資金をもとに徹底した出土遺物の分析を行った。次節以降において、発掘調査と遺物分析の結果を提示する。ただし、出土遺構や遺物の詳細については紙幅の都合上最小限にとどめる（註9）。

### 3-3. ロロ神殿麓の墓地の発掘

ロロ神殿麓の墓地の発掘（2006および2008年）では、シカン神を祀ったロロ神殿の周囲を五つの立坑墓（墳墓1、墳墓2、北東の墓1、北東の墓2、広場の墓）が囲み、さらにそのうち二つを小さな24の墓や供物の貯蔵庫が囲むという入れ子構造が明らかになり、これまでレーダー探査結果によって主張されていた墓地の計画的なレイアウトが証明された〔Shimada et al 2007〕。副葬された神像付き黒色還元焼成土器（いわゆるワコレイ）の形状および装飾の特徴から、これらの墓は中期シカン前期から後期にかけてのものであると推定された。一部盗掘跡が見られるものもあったが、ロロ神殿麓西側の墓は幸いなことにいずれも未盗掘であった（図3）。

未盗掘の墓は、祖先崇拝の有無の検証に役立った。ドゥラントがアンデスの民族歴史学資料を用いたように、筆者は世界の民族学的事例から祖先崇拝儀礼の普遍的な性質を抽出しつつ、一方でシカンの特殊性を考慮した上で、それがどのような形で物質文化や行動の痕跡として考古学的に同定され得るかを詳細に検証した

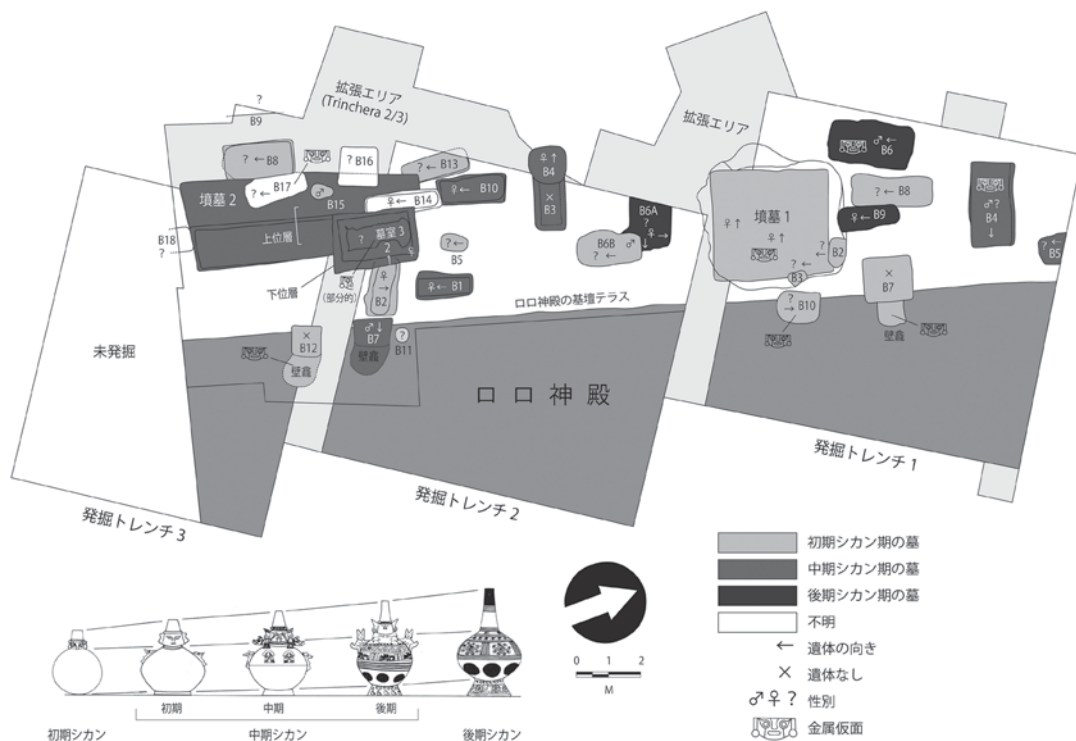


図3 ロロ神殿麓西側の墓地における埋葬の配置（土器編年は Shimada 1990:328, Fig. 18 より複製）

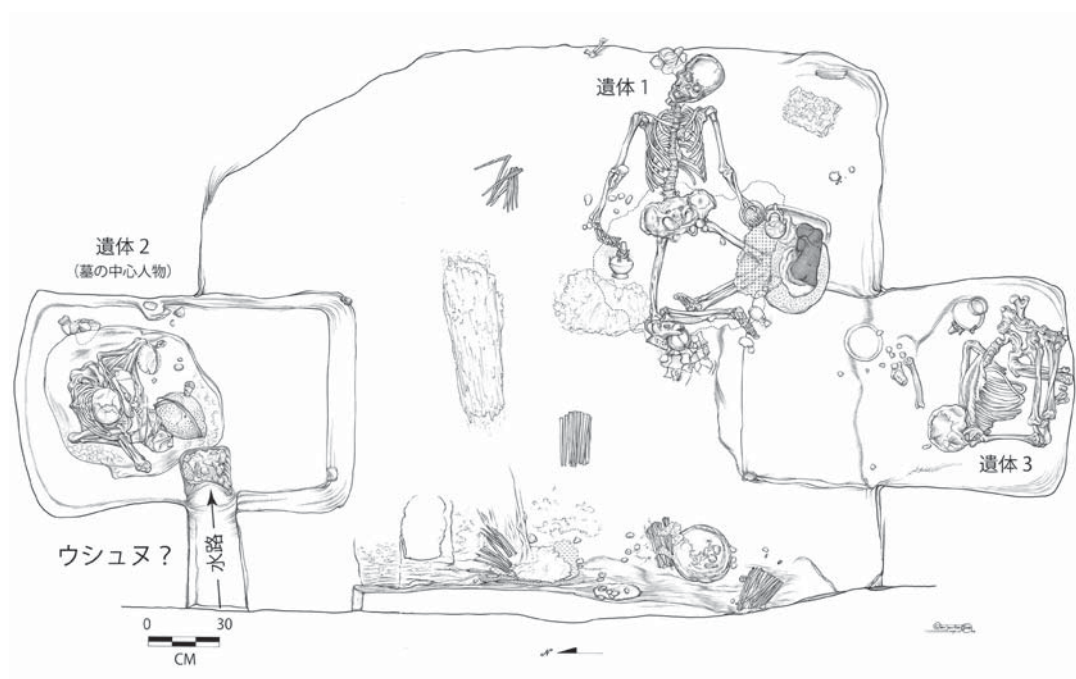
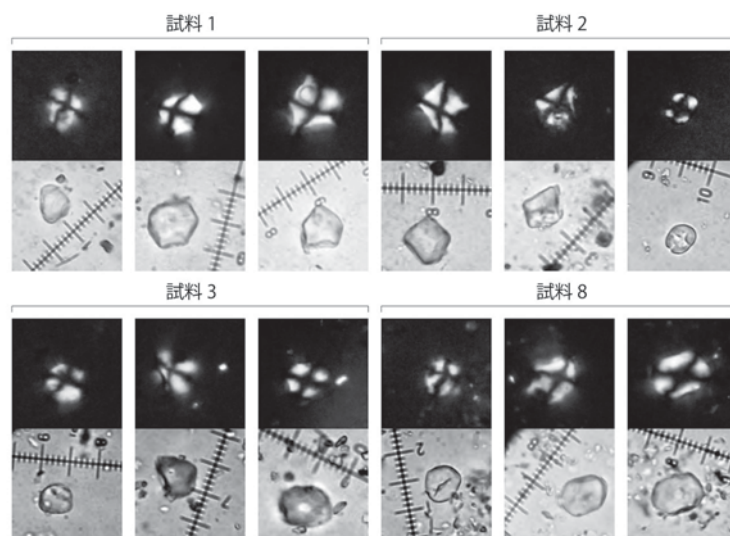


図4 地上から北東の墓1の玄室へと繋がる竪型地下水路（島田泉およびセサル・サミヤンによる作図）

ID	コード	発掘エリア	区画	層位	遺構	分類	検出頻度
1	T-96	EA-3		OS-6	Canal 2	<i>Zeamays</i>	*
2	T-114	EA-3	1y2	OS-6	Canal 2	<i>Zeamays</i> cf. 1 indeterminate	*****
3	CE-459	EA-4	34C	OS-11		<i>Zeamays</i>	*****
4	CE-491	EA-4	33	OS-11C		<i>Zeamays</i>	***
5	CE-512	EA-4	6	OS-11A		<i>Zeamays</i>	*
6	CE-519	EA-4	33	OS-11A		<i>Zeamays</i>	*
7	CE-531	EA-4	38	OS-11		—	—
8	CE-536	EA-4	38	OS-11A		<i>Zeamays</i>	*****
9	CE-263	EA-5	7D	OS-10		—	—
10	CE-265	EA-5	6	OS-10		<i>Zeamays</i>	***
11	CE-266	EA-5	7A	OS-10		<i>Zeamays</i>	*
12	CE-434	EA-5	13A	OS-11		<i>Zeamays</i>	***
13	CE-576	EA-5		OS-10/11	T-NE2	—	—
14	CE-563	EA-6		OS-12	T-PL	<i>Zeamays</i> cf.	*

表1 同定されたデンプン粒の出土コンテキストと検出量

図5 同定されたトウモロコシのデンプン粒  
(出土コンテキストと検出量については表1を参照)

調理（磨り潰しや熱処理）の痕跡が見つかった（表1、図5）。献酒のためにアカと称されるトウモロコシの醸造酒（チチャ）が作られ、玄室や儀礼用水路に注がれたと考えられる。

さらに、ロロ神殿麓西側の墓地では、埋葬後も墓の直上で約400年間（地層にして14層）に渡って地表面でポーニャと称されるアルカロポの葉や細かい枝を燃やす儀礼を行ったり、供物を捧げた痕跡が見つかった。これらの儀礼や供儀が行われた地表面の多くは水性堆積層に挟まれる形で見つかり、大雨や洪水の最中もしくは直後のぬかるんだ状態で儀礼活動が行われたことを示唆している。この地表面に踏み固められた花粉の種判別分析を行ったところ、同定された植物種の多くが毎年2～7月に花粉の飛散を伴う繁殖期を迎えるものであった（図6）。これらの発見は、墓地やその周辺が、子孫たちが定期的に繰り返し訪れ、（祖先との交流を行うため

[ Matsumoto 2014b:156-203]。すでに述べたように、祖先崇拜におけるもっとも顕著な特徴のひとつは、埋葬後も継続する死者と生者の儀礼的交流である。ロロ神殿の麓で新たに見つかった五つの立坑墓のすべてにおいて埋葬後の儀礼跡が見つかったが、とくに興味深かったのは、それらのうちのひとつ（北東の墓1）が、ウシュヌ<sup>(註10)</sup>のような玄室に献酒をするための堅型地下水路を備えていたことである（図4）。また、この墓の近くでT字型に走る小さな儀礼用水路が見つかった。一端がラ・レチェ川、残りの二端はそれぞれロロ神殿とコロラダ神殿に向かって延びており、地表面と水路底面の標高を計測した結果、水路内を流れる液体は二つの神殿から川に向かって流れたはずだという結論に達した。水路内の堆積物を分析したところ、トウモロコシのデンプンだけが大量に検出され、デンプン粒には









写真1 シカン埋葬様式（発掘トレンチ1の墳墓1）



写真2 モチェ埋葬様式（発掘トレンチ2の埋葬1）

### 3-4. 大広場の発掘

ロロ神殿に隣接する大広場の発掘では、上記の埋葬活動とほぼ同時に行われた様々な活動の痕跡が見つかった。特筆すべきは床面に作られたカマド群の発見である（写真3）。最も大きなものは九平方メートルにも及んだ。それぞれのカマドの周囲では、焼けた獣骨や貝殻、土器片などを大量に含んだ分厚い（20～30cm）灰土層が記録された。カマドの周辺で出土した土器片を分析したところ、皿や鉢の比率が高く、大規模な飲食が行われていたことが判明した。食器の内面に残っていた付着物の分析により、先述の儀礼用水路から採取した土壤サンプル同様、調理の痕跡を示す多量のデンプン粒が見つかり、アカ（トウモロコシの醸造酒）が消費されていたことが示唆された（表1および図5）。

出土獣骨の多くはラクダ科動物のリヤマが占め、通常であれば屠殺後の解体に際して取り除かれる部位（たとえば背骨）が多く出土していることや、近くの墓からは頭部と肢遠位部のみが出土していることから、死者の埋葬時にリヤマをここで屠殺・解体し、一部を墓に供えた後に残りを食したことが示唆された。同じ神を信仰する集団が祭の後に神饌や供物の飲食をともにするという「神との共飲共食」は、祭事における中心的な要素のひとつである〔岩井&日和 2007〕。共飲共食が行われたとすれば、それは大広場内での飲食と墓地での祖先の埋葬をシンボリックに紐付ける重要なリンクとなろう。

飲食に使用された皿や鉢は、製作技術や仕上がりの質の違いなどを定量化したデータのクラスター分析によって、明確に3群に分類された。クラスター1と2は装飾がなく磨きも甘い器からなり、クラスター3には丁寧に磨きがかかった海岸カハマルカ（もしくはシカン彩色皿）と呼ばれる彩色器が含まれた。物質的な豊かさが社会的地位を忠実に反映するシカン社会においては、これらのグループは身分の違いと対応するものと考えられる。

また、これらの皿や鉢で機器中性子放射化分析（INAA）を行った結果、全225試料のうち、122が三つの組成グループに分類された（Sicán BDP Groups 1~3; 図7）。Sicán BDP Group 1<sup>註11</sup>はCa（カルシウム）の含有率が高いが（2.74～4.38%）、石灰岩や方解石、白雲石、貝殻を混和材に使った場合（通常5%以上）ほどではない。Killick [1990]が指摘するように、もともと混入物の多い粘土が使われている可能性が高い。Sicán BDP Group 1の組成には、Caの他にもNa（ナトリウム）やK（カリウム）が多く含まれる。Montenegro [1997]によれば、サーニヤ谷やヘケテペケ谷出土の海岸カハマルカ土器には雲母と長石が含まれるとのことであるが、NaやKの含有率の高さが雲母と長石の存在を示すのであれば、Sicán BDP Group 1が外来のものである可能性が強まる。

残りの試料(とくにSicán BDP Group 2に含まれるもの)はAs(ヒ素)の含有率が高かった。おそらくヒ素青銅と土器を同時制作していた工房で作られ、制作過程で胎土にヒ素が入りこんだのであろうと考えられる。これまでに当地域で見つかっているマルチクラフト工房はランバイエケ川下流域に位置するワカ・シアルーペのみである。ここではモチェの文化アイデンティティを持つ職人がシカン貴族の管理下で金属製品(主にヒ素青銅製品)と土器を制作していた[Taylor 2002; Klaus 2003]。また、Shimada et al. [2003]によるメスバウアー分光法分析および中性子放射化分析によって、ロロ神殿麓北側の「西の墓」から出土した土器はワカ・シアルーペの工房で作られたものであることが判明している。したがって、大広場で使われた食器の大部分は地域内(おそらくワカ・シアルーペ)で作られ、一部のみが招待客などによって近隣地域(サーニャ谷やヘケテペケ谷)から持ち込まれた可能性が示唆される[Matsumoto 2015]。

さらに、食べ物のゴミや土器片に混じって、「ファルド」と呼ばれる遺体の織物包みを作るための道具や材料

(縫い針、紡錘車、ビーズ用貝殻、辰砂顔料など)が見つかった。また、ロロ神殿の北東角では金属工房も見つかり、残余物の蛍光X線分析の結果、この工房では銅と金の合金を作っていたことが判明した。溶鉱炉や原鉱、鉱滓などが出土しなかったことから溶融製錬が行われていたとは考えにくく、最終段階である加工過程のみが行われたと考えるのが妥当である。つまり、墓に副葬された金属製品がここで作られていた可能性が高い。これらの発見は、大広場では大規模な饗宴と並行して、遺体の埋葬や供物の準備が行われていたことを示している。

#### 4. 考察

シカン遺跡の中心部にて神殿ごとに貴族家系の祖先が祀られたのは、先の「原型的な理想としての祖先崇拜



写真3 大広場で出土した大型のカマド

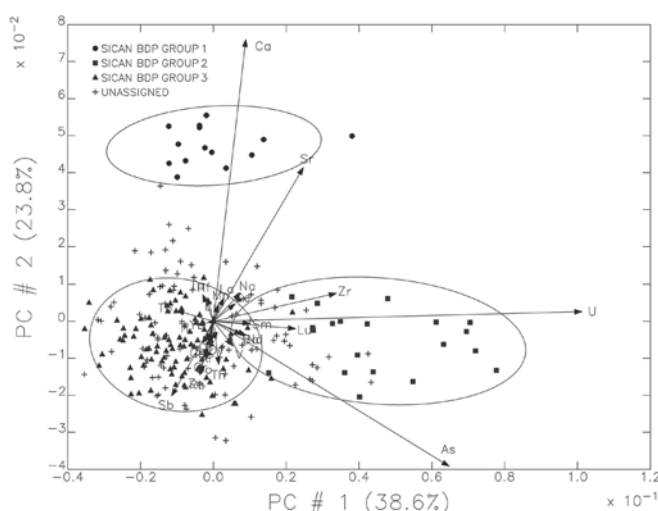


図7 機器中性子放射化分析(INAA)の結果明らかになった組成グループSicán BDP Groups 1~3

のイメージ」において複数のアイリユがそれぞれのマルキを祀ったのと空間的・物質的側面にいくつもの類似点がある。いずれのケースにおいても、祖先遺体の埋葬後も子孫たちとの儀礼的な交流が続き、隣接した公共空間で祖先を祀るための儀礼活動（おもに献酒や饗宴）が行われている。この点において、祖先崇拜が「アンデス的なもの」のひとつとして数えられることに何ら異論はない。ところが、シカン遺跡での事例では、儀礼の物的痕跡を事細かに見ていくことによって、シカンの祖先カルトの特殊性を垣間見ることができた。ここでは二つの重要な点について論じてみたい。

#### 4-1. 地縁・血縁の枠を超えた祖先カルト

ロロ神殿麓西側墓地の発掘で明らかになった〔神殿＞座位の立坑墓＞伸展位の墓〕という入れ子構造的空間配置は、〔シカン神＞シカン人上流貴族＞モチェ人下流貴族〕という（シカン上流貴族たちが思い描いた）社会階層の序列を反映しているのではないかと考えられる。無文字のアンデス社会では、このような墓地のレイアウトが家系図に代わって親族構造や家系の継続性、さらには血縁関係にない「他者」との繋がりを表現する媒体として機能していた可能性がある。注目すべきは、この階層的な“家系図”の頂点に神が据えられていたことである。シカン上流貴族の遺体はシカン神を模した仮面を被せられ、神格化されてから埋葬された。その神を祀ったロロ神殿は30メートルを超す基壇の頂上に作られ、壁で囲まれていた。細長い傾斜路によってしか神殿には入ることができず（図2）、上流貴族にしか登頂が許されていなかったと考えられる。このようなデータは、神との繋がりを独占することが上流貴族にとって重要な権力資源のひとつであったことを示唆している〔Helms 1998〕。

また同時に、モチェの文化背景を持つ者たちが下流貴族として取り込まれ、先行する異文化の慣習とアイデンティティが寛容さをもって迎え入れられていたことも特筆すべきである。これはシカンの祖先崇拜が、これまで（アンデスを含めて）民族学的に広く議論されてきた世帯もしくは親族集団レベルの小規模な信仰とは異なり、血縁に縛られないより大きな社会集団を対象としていた可能性を示唆するのではないだろうか〔Friedman 1984; Liu 1999, 2000 を参照〕。

#### 4-2. 祖先の概念に生じた変化

同じくロロ神殿麓西側墓地の発掘では、断続的な大雨や洪水の痕跡を明瞭に示す水性堆積と墓の直上を人々が訪れた痕跡が幾重にも渡って交互に記録されたが、これは水に関連したイベントとその下に埋められた祖先との間にある、シンボリックで根強い繋がりを示唆している。訪問者たちは、あるときは大規模に地表面を燃やし、またあるときは火を使った供儀を行った。さらに大規模な火の使用が主要基壇の上部で記録されているが、それが行われたのが歴史的な規模のエル・ニーニョ現象（1050～1100年頃）が引き金となって発生した「フェンペイエックもしくはナィムラップ洪水」〔Moseley and Cordy-Collins 1990〕と呼ばれる大洪水の直後であったと言われている。火には物質を化学的および物理的に変化させる属性があるように、火をつけるという行為は、ファン・ヘネップの通過儀礼の図式における「過渡期」やターナーの「リミナリティ」のような状態に終止符を打つための、ある種の儀礼的暴力であったかもしれない。火を使った儀礼は、気候変動や社会不安によって一時的に崩れた世界の秩序を回復することができる祖先の助けを乞うための行動的供儀（performative offering）だったのではないだろうか。そして、巨大な墓標としての神殿基壇は、中期シカン期の祖先カルトから何世紀も経った後でも、はるか昔にその麓に埋葬された祖先たちを再生・更新する記憶装置として機能したのであろう。あるいは祖先そのものと見なされたかもしれない。

近年、筆者は島田とともに「(シカン遺跡の) 神殿基壇は崇拝された祖先の魂(アニマ)と肉体を具象化したものであると認識され、生命を与える水を海岸に供給する聖なる山のシンボルとして扱われた」という考えを発表した[Shimada and Matsumoto 2011]。これは、2008年に発掘された発掘区1(西の墓のすぐ南側)でのある興味深い発見が元となっている(図2)。この発掘区では、ロロ神殿の北端に沿って、いくつかの大型の瓶が供物として置かれているのが見つかった。これらの瓶は、ロロ神殿の急な斜面を流れ落ちた雨水が

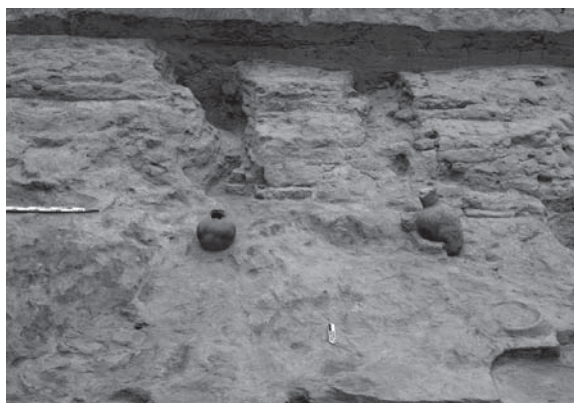


写真4 ロロ神殿の北端に沿って置かれた瓶(島田泉提供)

作った溝が地表面と接する地点に注意深く置かれていた(写真4)。それらが置かれた絶対年代はいまだ不明であるが、層位上、明らかにチムー=インカ期以降のことである。しかもこの時期に雨水によって浸食されたロロ神殿は改修されることなく放置され<sup>(註12)</sup>、むしろ侵食されることによって山のように見えるその姿が好まれたかのようである(図9)。エル・ニーニョ時に大雨が降れば、その雨水はまるで山の斜面を流れる川のように見えたのかもしれない。神殿基壇から流れ出る液体には何らかの強いシンボリックな意味が付与された可能性すら考えてよい。この発見は、時間の経過とともに、神殿の意味や景観の意味の変化に加えて、祖先の社会的意味・位置付けに変化が生じたことを示唆する。

## 5. おわりに

本研究は、シカン遺跡での埋葬発掘と遺物分析の結果、これまで経済的な側面から論じられることがほとんどであった祖先崇拝の研究に対して、新しいモデルを提供することとなった。シカン上流貴族による祖先崇拝は経済戦略の一つではなく、より宗教的、イデオロギー的な役割を担っていた。彼らは神を頂点とした想像上のヒエラルキーを構築し、それにもとづいてシカン社会における社会階層を固定化しようと試みた。そのヒエラルキーにおいて自らを神に次ぐ地位(現世での頂点)に置き、神格化させた祖先を通じて神との繋がりを独占した。さらに自分たちの下の階層としてモチエの元貴族を取り込み、首都の中心部で定期的な大規模な饗宴を開いて階層間の関係を調整したのであろう。これは異なる社会階層に置かれた複数民族を共存させるための重要なイデオロギー戦略であった。これは、第一章で述べた、アンデス山岳地方で記録された民族歴史学資料から抽出された、祖先の「典型的なイメージ」や、世帯もしくは血縁集団レベルでの崇拝とは大きく異なる。また、祖先崇拝儀礼の通時的期変化を考古学的な長期スパンで追うことによって、祖先の概念に変化が生じた可能性があることも明らかになった。

民族歴史学や民族誌における研究事例や議論は、考古学にとって常に理論的インスピレーションの宝庫であるが、そこから得られた説明モデルを無批判に考古学事例に援用すべきではない。地域や時代の特異性を十分に考慮し、研究対象を長期的なスパンで見渡すことが重要である。そして、研究成果を民族歴史学や民族誌へフィードバックすべきである。こうした「考古学だからこそできること」を徹底することによって、民族歴史学や民族誌と相互補完的な関係を構築でき、“lo andino(アンデス的なもの)”をめぐる議論をさらに発展さ



せることが可能となろう。

### 【謝辞】

まず、二度に渡る発掘調査への参加と、貴重な発掘データの使用を許可してくださった南イリノイ大学人類学科島田泉教授に対して深く感謝申し上げたい。また、本稿における議論を形成する過程で大きなお力添えをいただいた博士論文審査委員会の先生方やハーバード大学ダンバートンオックス研究所・先コロンブス期研究科の2012-2013年度のフェロー各位、各種分析作業を担当された研究協力者各位、本稿に対して建設的なコメントやアドバイスをくださった2名の査読者にもお礼申し上げる。なお、2006および2008年の発掘調査は株式会社TBSテレビによる島田教授への研究助成、発掘後の遺物分析は松下幸之助記念財団（助成番号10-066）およびアメリカ国立科学財団（助成番号NSF-BCS-1339599）による筆者への研究助成金をもとに行われた。

### 註

- （註1） ウマ・パチャとは先史時代の概念であるウパイマルカとよく似た言葉である [Salomon 1995:341]。それは山岳地のアイリュ・カータにおける神話上の起源地であり、人々や動物、時間、そして歴史が帰帰するための場所であるとみなされる。カータの人々は「ウマ」を頭や水と、「パチャ」を時間や空間と結びつける [Bastien 1995:360]。パチャは、時間の中のある一瞬と、空間の中のある一点を同時に意味する、直訳できない概念である。この概念はまた、世界や大地を意味することもある [Salomon 1991:14]。
- （註2） <固形物/男性>対<液体/女性>という別の二項対立については Bastien 1978 を参照。
- （註3） ウマ・パチャとは先史時代の概念であるウパイマルカとよく似た言葉である [Salomon 1995:341]。それは山岳地のアイリュ・カータにおける神話上の起源地であり、人々や動物、時間、そして歴史が帰帰するための場所であるとみなされる。カータの人々は「ウマ」を頭や水と、「パチャ」を時間や空間と結びつける [Bastien 1995:360]。パチャは、時間の中のある一瞬と、空間の中のある一点を同時に意味する、直訳できない概念である。この概念はまた、世界や大地を意味することもある [Salomon 1991:14]。
- （註4） Doyle [1988:111] はカヤンを「しばしばテラスによって作られ、人々が集まってマルキやマチャイに埋葬された他の人物に関連した活動を行うことのできる平らな空間」と定義している。これまでに様々な遺跡において考古学事例が見つかっている（たとえばアンカシュのパシャシュやパンパ・チカ; Grieder 1978 および Dulanto 2002 を参照）。
- （註5） マルキの「住居」の形状や名前には様々なバリエーションがある。（1）マチャイ（洞窟）、（2）チュルパ（地上式塔状墓）、（3）ブクヨ（埋葬用家屋）、（4）アヤ・ワシ（死者の家）などである [Salomon 1995:322]。
- （註6） コノパとは、個人によって所有・崇拝される小さな聖なる物体を指す [Arriaga 1968 [1621]:178]。石を素材として食用植物や動物（たとえばトウモロコシ、ジャガイモ、リヤマなど）の形に成形され、生殖力を内包していると信じられた。Arriaga [1968 [1621]:28] はこれを古代ローマ宗教における家の守り神・ラレスおよびペナテスと比較している。
- （註7） また、彼らの民族学はムラによる生態学的理論とザウデマによる構造主義的方法論の組み合わせからなるものであった [Brownrigg 1973:106]。したがって裏返せば、「アンデスのなもの」に対する



これまでの批判は、歴史主義者が構造主義的議論を批判するのと基本的には同じものであった。アンデス高地に暮らす人々を先スペイン期から続く様々な文化的実践の純潔な継承者と見なすがゆえに、彼らを歴史から切り離し、無時間的で本質主義的な枠組みの中に押し込めてしまっている点を指摘したのである（たとえば Starn 1991; Weismantel 1991）。考古学研究においては、前章で指摘したように、祖先崇拜が行われた歴史的コンテキストや儀礼行為の通時的変化を明らかにすることが必須である。

- (註 8) ランバイエケ複合は、Kroeber [1930:55-57] によってはじめて認識され、後に Kosok [1965:147] によって名付けた。しかしこれを構成する谷の数には異論があり、エリン (1987) は踏査の結果、ヘケテペケ谷の灌漑用水は独立したシステムであり、以北のランバイエケ複合同も、以南のチカマ谷とも接していないと主張する。
- (註 9) さらに詳細については筆者の博士論文 [Matsumoto 2014a] を参照されたい。
- (註 10) ウシュヌとは、タワテンクスーユの広場の一角に配され、祖先への供犠のために使用される床面に開いた立坑のことをいう。広場内の小基壇や祭壇を指す場合もあるが、ここでは Zuidema [1979] による定義に従う。
- (註 11) BDP とは Bowl/Dish/Plate の略である。Montenegro [1997] を参考に、側壁の角度に応じて (1) Bowl、(2) Dish/Bowl、(3) Dish、(4) Plate の 4 つに分類した [Matsumoto 2014a:561, Figure 7.5 を参照]。Sicán BDP Group はその総称である。
- (註 12) 2008 年の発掘区 7 および 8 での発掘により、ロロ神殿は少なくとも一度増築されたことが判明しているが、修復の痕跡は確認されていない。

## 参考文献

Allen, Catherine J.

1982 Body and Soul in Quechua Thought. *Journal of Latin American Lore* 8(2):179-196.

1988 *The Hold Life Has: Coca and Cultural Identity in an Andean community*. Smithsonian Series in Ethnographic Inquiry. Smithsonian Institution Press, Washington.

Arguedas, José María

1956 Puquio, una cultura en proceso de cambio. *Revista del Museo Nacional* 25:184-232.

Arriaga, Pablo José de

1968 [1621] *The Extirpation of Idolatry in Peru*. Translated by L. C. Keating. University of Kentucky Press, Lexington.

Bastien, Joseph W.

1978 *Mountain of the Condor: Metaphor and Ritual in an Andean Ayllu*. West Publishing Co., St. Paul, MN.

1995 The Mountain/Body Metaphor Expressed in a Kaatan Funeral. In *Tombs for the Living: Andean Mortuary Practices*, edited by T. D. Dillehay, pp. 355-378. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Betanzos, Juan de

1996 [1551] Narrative of the Incas. 1st ed. Translated by D. Buchanan and R. Hamilton. University of Texas Press, Austin.

- 2004 [1551] *Suma y narración de los incas*. Polifemo, Madrid.
- Bloch, Maurice
- 1971 *Placing the Dead: Tombs, Ancestral Villages and Kinship Organization in Madagascar*. Seminar Studies in Anthropology, 1. Seminar Press Ltd., New York.
- Chapman, Robert W. and Klavs Randsborg
- 1981 Approaches to the Archaeology of Death. In *The Archaeology of Death*, edited by R. W. Chapman, I. Kinnes and K. Randsborg, pp. 1-24. Cambridge University Press, New York.
- Cieza de León, Pedro de
- 1883 [1551] *The Second Part of the Chronicle of Peru*. Translated by C. R. Markham. Works issued by the Hakluyt Society. Printed for the Hakluyt Society, London.
- Classen, Constance
- 1990 *Inca Cosmology and the Human Body*, Ph.D. Dissertation. Faculty of Religious Studies, McGill University, Montreal.
- Cobo, Bernabé
- 1990 [1653] *Inca Religion and Customs*. 1st ed. Translated by R. Hamilton. University of Texas Press, Austin.
- Collin Delavaud, Claude
- 1968 Les régions côtières du Pérou septentrional: Occupation du sol, aménagement régional. *Travaux de l'Institut français d'études andines*, t. 12. Institut français d'études andines, Lima, Perú.
- Craig, Alan K. and Izumi Shimada
- 1986 El Niño Flood Deposits of Batán Grande, Northern Peru. *Geoarchaeology: An International Journal* 1(1):29-38.
- Doyle, Mary E.
- 1988 *The Ancestor Cult and Burial Ritual in Seventeenth and Eighteenth Century Central Peru*, Ph.D. Dissertation, Department of History, University of California, Los Angeles.
- Dulanto, Jalh
- 2002 The Archaeological Study of Ancestor Cult Practices: The Case of Pampa Chica, a Late Initial Period and Early Horizon Site on the Central Coast of Peru. In *The Space and Place of Death*, edited by H. Silverman and D. B. Small, pp. 97-117. American Anthropological Association, Arlington, VA.
- Duviols, Pierre
- 1967 Un inédit de Cristobal de Alborno: La instrucción para descubrir todas las guacas del Pirú y sus camayos y haziendas, *Journal de la Société des Américanistes* 56(1):7-39.
- Eling, Herbert H., Jr.
- 1987 *The Role of Irrigation Networks in Emerging Societal Complexity during Late Pre-Hispanic Times, Jequetepeque Valley, North Coast, Peru*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, University of Texas at Austin, TX.
- Endicott, Kirk
- 1979 *Batek Negrito Religion: The World-View and Rituals of a Hunting and Gathering People of Peninsular Malaysia*. Clarendon Press, Oxford.
- Evens, Terence M. S.
- 1984 Nuer Hierarchy. In *Differences, Valeurs, Hiérarchie: Textes Offerts à Louis Dumont*, edited by J.-C. Galey, pp.

319-334. Éditions de l'École des Hautes Études en Sciences Sociales, Paris.

Fortes, Meyer

1965 Some Reflections on Ancestor Worship in Africa. In *African Systems of Thought: Studies presented and discussed at the third International African Seminar in Salisbury, December, 1960*, edited by M. Fortes and G. Dieterlen, pp. 122-144. Oxford University Press, London.

1976 An Introductory Commentary. In *Ancestors*, edited by W. H. Newell, pp. 1-16. Mouton Publishers, Paris.

Friedman, Jonathan

1984 Tribes, States, and Transformations. In *Marxist Analyses and Social Anthropology*, edited by M. Bloch, pp. 161-202. ASA Studies. Tavistock Publications, London.

Glazier, Jack

1984 Mbeere Ancestors and the Domestication of Death. *Man* 19:133-148.

Goldman, Irving

1963 *The Cubeo: Indians of the Northwest Amazon*. University of Illinois Press, Urbana.

Goldstein, Lynne

1976 *Spatial Structures and Social Organization: Regional Manifestations of Mississippian Society*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Northwestern University, Evanston, IL.

1981 One-Dimensional Archaeology and Multi-Dimensional People: Spatial Organization and Mortuary Analysis. In *The Archaeology of Death*, edited by R. Chapman, I. Kinnes and K. Randsborg, pp. 53-69. Cambridge University Press, Cambridge.

Goody, Jack

1962 *Death, Property and the Ancestors: A Study of the Mortuary Customs of the LoDagaa of West Africa*. Stanford University Press, Stanford.

Gose, Peter

1996 Oracles, Divine Kingship, and Political Representation in the Inka State. *Ethnohistory* 43(1):1-32.

Grieder, Terence

1978 *The Art and Archaeology of Pashash*. University of Texas Press, Austin, TX.

Guaman Poma de Ayala, Felipe

1956-66 [1615] *La Nueva Crónica y Buen Gobierno*. 3 vols. Editorial Cultura, Lima, Peru.

Gudeman, Stephen

1986 *Economics as Culture: Models and Metaphors of Livelihood*. Routledge and Kegan Paul, London.

Hayashida, Frances M.

2006 The Pampa de Chaparí: Water, Land, and Politics on the North Coast of Peru. *Latin American Antiquity* 17(3):243-263.

Helms, Mary W.

1998 *Access to Origins: Affines, Ancestors, and Aristocrats*. University of Texas Press, Austin, TX.

Herskovits, Melville Jean

1938 *Dahomey: An Ancient West African Kingdom*, Vol. I. J. J. Augustin, New York.

Heyerdahl, Thor, Daniel H. Sandweiss and Alfredo Narváez (editors)

1995 *Pyramids of Túcume: The Quest for Peru's Forgotten City*. Thames and Hudson, New York.

岩井宏實, 日和祐樹

2007 『神饌：神と人との饗宴（ものと人間の文化史）』, 法政大学出版局, 東京.

Kaulicke, Peter

1997 Una introducción. In *La muerte en el antiguo Perú: Contextos y conceptos funerarios*, *Boletín de Arqueología PUCP*, No. 1. pp.7-54, Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Killick, David

1990 Petrographical Analysis of Peruvian Ceramics. Ms. on file, Department of Anthropology, Southern Illinois University, Carbondale.

Klaus, Haagen D.

2003 *Life and Death at Huaca Sialupe: The Mortuary Archaeology of a Middle Sicán Community, North Coast of Peru*, M.A. Thesis. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.

2008 *Out of Light Came Darkness: Bioarchaeology of Mortuary Ritual, Health, and Ethnogenesis in the Lambayeque Valley Complex, North Coast of Peru (AD 900-1750)*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Ohio State University, Columbus, Ohio.

Kosok, Paul

1965 *Life, Land, and Water in Ancient Peru: An Account of the Discovery, Exploration, and Mapping of Ancient Pyramids, Canals, Roads, Towns, Walls, and Fortresses of Coastal Peru with Observations of Various Aspects of Peruvian Life, Both Ancient and Modern*. Long Island University Press, New York.

Kroeber, Alfred L.

1930 Archaeological Explorations in Peru, Part II: The Northern Coast. *Anthropology, Memoirs*, Vol. II, No. 2. Field Museum of Natural History, Chicago, IL.

Liu, Li

1999 Who were the ancestors? The origins of Chinese ancestral cult and racial myths. *Antiquity* 73(281):602-613.

2000 Ancestor Worship: An Archaeological Investigation of Ritual Activities in Neolithic North China. *Journal of East Asian Archaeology*, Volume 2, Issue 1, pp.129-164.

Masuda, Yoshio, Izumi Shimada and Craig Morris (editors)

1985 *Andean Ecology and Civilization: An Interdisciplinary Perspective on Andean Ecological Complementarity*. University of Tokyo Press, Tokyo, Japan.

Matsumoto, Go

2014a *Ancestor Worship in the Middle Sicán Theocratic State*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.

2014b El culto a los ancestros: aproximación y evidencia. In *Cultura Sicán: Esplendor preincaico de la costa norte*, edited by I. Shimada, pp. 195-215. Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima.

2015 Compositional Analysis of Food Vessels from the Middle Sicán Great Plaza. Paper presented at the 43rd Annual Meeting of the Midwest Conference on Andean and Amazonian Archaeology and Ethnohistory, February 27th - March 1st, 2015, Nashville, TN.

Meggitt, Mervyn J.

- 1965a *The Lineage System of the Mae-Enga of New Guinea*. Barnes & Noble, New York.
- 1965b *The Mae Enga of the Western Highlands*. In *Gods, Ghosts, and Men in Melanesia: Some Religions of Australian New Guinea and the New Hebrides*, edited by P. Lawrence and M. J. Meggitt, pp. 105-131. Oxford University Press, Melbourne.
- Meillassoux, Claude
- 1972 From Reproduction to Production: A Marxist Approach to Economic Anthropology. *Economy and Society* 1(1):93-105.
- Montenegro, Jorge
- 1997 *Costal Cajamarca Pottery from the North Coast of Peru: Style, Technology, and Function*, M.A. Thesis. Department of Anthropology, Southern Illinois University, Carbondale, IL.
- Moseley, Michael E.
- 1983 The Good Old Days Were Better: Agrarian Collapse and Tectonics. *American Anthropologist* 85(4):773-799. Myers, Fred R.
- 1986 *Pintupi Country, Pintupi Self: Sentiment, Place, and Politics among Western Desert Aborigines*. Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.
- Moseley, Michael E. and Alana Cordy-Collins (editors)
- 1990 *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Newell, William H.
- 1976 Good and Bad Ancestors. In *Ancestors*, edited by W. H. Newell, pp. 17-29. Mouton Publishers, Paris.
- Nielsen, Axel E.
- 2008 The Materiality of Ancestors: Chullpas and Social Memory in the Late Prehispanic History of the South Andes. In *Memory Work: Archaeologies of Material Practices*, edited by B. J. Mills and W. H. Walker. School for Advanced Research Press, Santa Fe.
- Nolan, James Lee
- 1980 *Prehispanic Irrigation and Polity in the Lambayeque Sphere, Peru*, Ph.D. Dissertation. Faculty of Political Science, Columbia University.
- Randall, Robert
- 1982 Qoyllur Rit'i, an Inca fiesta of the Pleiades: reflections on time & space in the andean world. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 11(1-2):37-81.
- Renfrew, Colin
- 1976 Megaliths, Territories and Populations. In *Acculturation and Continuity in Atlantic Europe*, edited by S. De Laet, pp. 198-220. De Tempel, Bruges.
- Salomon, Frank
- 1985 The Historical Development of Andean Ethnology. *Mountain Research and Development* 5:79-98.
- 1991 Introductory Essay: The Huarochirí Manuscript. In *The Huarochirí Manuscript: A Testament of Ancient and Colonial Andean Religion*, edited by F. Salomon and G. L. Urioste, pp. 1-38. University of Texas Press, Austin, TX.



- 1995 'The Beautiful Grandparents': Andean Ancestor Shrines and Mortuary Ritual as Seen Through Colonial Records. In *Tombs for the Living: Andean Mortuary Practices*, edited by T. D. Dillehay, pp. 315-353. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Saxe, Arthur A.

- 1970 *Social Dimensions of Mortuary Practices*, Department of Anthropology, University of Michigan, Ann Arbor.
- 1971 Social Dimensions of Mortuary Practices in a Mesolithic Population from Wadi Halfa, Sudan. In *Approaches to the Social Dimensions of Mortuary Practices*, edited by J. A. Brown, pp. 39-57. Memoirs of the Society for American Archaeology, No. 25, Washington D.C.

Sherbondy, Jeanette E.

- 1982 *The Canal Systems of Hanan Cuzco*, Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, University of Illinois at Urbana-Champaign, University Microfilms, Ann Arbor.
- 1986 Mallki: Ancestros y Cultivo de árboles en los Andes. Proyecto FAO-Holanda/INFOR, Documento de trabajo N°5, Lima, Peru.

島田泉

- 2009 「シカン文化とは何か：その発展、特徴、遺産」『特別展 インカ帝国のルーツ 黄金の都シカン』（島田泉・篠田謙一・小野雅弘編）pp.25-61、TBS テレビ。

Shimada, Izumi

- 1981 The Batan Grande-La Leche Archaeological Project: The First Two Seasons. *Journal of Field Archaeology* 8(4): 405-446.
- 1990 Cultural Continuities and Discontinuities on the Northern North Coast of Peru, Middle-Late Horizons. In *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*, edited by M. E. Moseley and A. Cordy-Collins, pp. 297-392. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- 1995 *Cultura Sicán: Dios, Riqueza y Poder en la Costa Norte del Peru*. Edu-Banco Continental, Lima.
- 2014 Detrás de la máscara de oro: la cultura Sicán. In *Cultura Sicán: Esplendor preincaico de la costa norte*, edited by I. Shimada, pp. 15-90. Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima.

Shimada, Izumi, Gabriela Cervantes, Carlos Gustavo Elera, Katsutomo Kato, Go Matsumoto, Elvis Mondragón and

Hirokatsu Watanabe

- 2007 Organization and Variability among Middle Sicán Elite Burials in Peru. Paper presented at the 72nd Annual Meeting of Society for American Archaeology, April 25 - 29th, 2007, Austin, TX.

Shimada, Izumi and James Fitzsimmons

- 2015 Introduction. In *Living with the Dead in the Andes*, edited by I. Shimada and J. Fitzsimmons. University of Arizona Press, Tucson.

Shimada, Izumi, Jo Ann Griffin and Adon Gordus

- 2000 The Technology, Iconography and Social Significance of Metals: A Multi-Dimensional Analysis of Middle Sicán Objects. In *Precolumbian Gold: Technology, Style and Iconography*, edited by C. McEwan, pp. 28-61. Fitzroy Dearborn Publishers, Chicago, IL.

Shimada, Izumi, W. Häusler, M. Jakob, Jorge Montenegro, J. Riederer and Ursel Wagner

- 2003 Early Pottery Making in Northern Coastal Peru. Part IV: Mössbauer Study of Ceramics from Huaca Sialupe.

*Hyperfine Interactions* 150:125-139.

Shimada, Izumi, Haagen D. Klaus, Rafael Segura and Go Matsumoto

- 2015 Conception and Treatment of the Dead on the Central and North Coast of Peru. In *Living with the Dead in the Andes*, edited by I. Shimada and J. Fitzsimmons. University of Arizona Press, Tucson.

Shimada, Izumi and Go Matsumoto

- 2011 Fire, Water, Huaca and Offerings: Rituals of Regeneration and Ancestor Veneration in the Sicán Culture. Proceedings of the 76th Annual Meeting of the Society for American Archaeology. Sacramento, CA, March 30th - April 3rd, 2011.

Shimada, Izumi, Crystal Barker Schaaf, Lonnie G. Thompson and Ellen Mosley-Thompson

- 1991 Cultural Impacts of Severe Droughts in the Prehistoric Andes: Application of a 1,500-Year Ice Core Precipitation Record. *World Archaeology* 22(3):247-270.

Shimada, Izumi, Kenichi Shinoda, Julie Farnum, R. S. Corruccini and Hirokatsu Watanabe

- 2004 An Integrated Analysis of Pre-Hispanic Mortuary Practices: A Middle Sicán Case Study. *Current Anthropology* 45(3):369-402.

Sillar, Bill

- 1992 The Social Life of the Andean Dead. *Archaeological Review from Cambridge* 11(1):107-123.

Stam, Orin

- 1991 Missing the Revolution: Anthropologists and the War in Peru. *Cultural Anthropology* 6(1):63-91.

Taylor, Sarah Ruth

- 2002 *Artisan Autonomy in the Middle Sicán State: Variability in Mold-Made Ceramic Production*, M.A. Thesis. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.

Thompson, Lonnie G., Ellen Mosley-Thompson, J. F. Bolzan and B. R. Koci

- 1985 A 1500-Year Record of Tropical Precipitation in Ice Cores from the Quelccaya Ice Cap, Peru. *Science* 229(4717): 971-973.

Tschauner, Hartmut

- 2001 *Socioeconomic and political organization in the late Prehispanic Lambayeque Sphere, northern North Coast of Peru*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Harvard University, Cambridge, MA.

Weismantel, Mary J.

- 1991 Maize Beer and Andean Social Transformations: Drunken Indians, Bread Babies, and Chosen Women. *MLN* 106(4):861-879.

Zuidema, R. Tom

- 1979 El Ushnu. *Revista de la Universidad Complutense* 27(117):317-362.

# Reassessing the Uniformitarian Image of Ancestors in the Andes: Based on Archaeological Data from Huacas de Sicán on the Peruvian North Coast

Go Matsumoto  
(Yamagata University)

Keywords: Andean uniformitarianism, Sicán/Lambayeque, ancestor veneration, ritual, feasting

Among the Andean ethnologists, the concepts of life, death, and ancestor have been considered as an example of “lo andino (things culturally Andean),” together with ecological complementarity, apocalyptic visions of Andean cultural history, moiety system, and mountain worship and personification. From an essentialist perspective, archaeologists have extracted an ideal-typical image of ancestors from ethnohistorical and ethnographic resources and applied to archaeological cases.

Compared to the abundant case studies about the late prehispanic ancestors in the southern highlands, however, the rest of the Andean World, particularly the North Coast, has been underrepresented. What has been treated as the “Andean” concept of ancestors is heavily based on those readily available information. It is dangerous to generalize a cultural trait documented in a certain area during a certain time period under the name of the “Andean.” Seemingly similar traits and practices may have carried different meanings in relation to different societal and environmental contexts. This will result in blindly ruling out the possibility that the ancestor concept may have varied in different areas and changed over time. The approach to implicitly or subconsciously search for pan-Andean characteristics across time and space and homogenize the entire Andean World is known as “Andean uniformitarianism.”

Uniformitarianism is an assumption initially proposed in geology that the natural laws and processes observed today have always operated in the past, and thus can be applied everywhere in the world. It would be possible in theory to suggest a single “Andean culture area” in terms of what has been known as “lo andino.” Although there is always a merit in generalizing the subject matter (a cultural trait in this case) to some extent and locating it in relation to other phenomena for a more comprehensive understanding of the subject, it should be clearly distinguished from the act of “rounding off factions” or specificities that best characterize the cultural trait in question.

Focusing on the northern half of the Andean World that has been underrepresented, this article aims to reassess the above uniformitarian image of ancestors, based on archaeological data from the excavations at Huacas de Sicán in the middle La Leche valley on the Peruvian North Coast and subsequent detailed analyses of excavated materials. The comparative study revealed a series of significant differences between the conventional image of ancestors and the archaeological case. Furthermore, a close look at the diachronic changes in rituals raised the possibility that the notion of ancestors might have been changed through time. By giving due consideration in the specificities of the time and region in question and historical contingencies and overlooking the subject matter from an archaeological long-term perspective, we archaeologists may be able to achieve a breakthrough to further develop the conventional arguments about “lo andino.”

原稿受領日 2017年10月18日

原稿採択決定日 2017年10月31日